

岐阜の「地域再生」を考える



受講料無料

9月27日 開講式 12:50~13:00

- 13:00~13:50 清水 浩二 (岐阜県環境生活部統計課)
統計から見た岐阜県の現状
- 14:00~15:20 向井 貴彦 (保全生態学)
地域の自然を活かしたまちづくりを考える
- 15:30~16:50 山本 公徳 (行政学)
「新しい公共」とNPO税制 ~「寄附文化」について考える~
- 17:00~ 質疑応答

9月28日

- 13:00~13:50 長尾 勝広 (岐阜市市民参画部市民参画政策課)
岐阜市におけるコミュニティ支援
- 14:00~15:20 富樫 幸一 (経済地理学)
甦りはじめた岐阜の街なかの風景
- 15:30~16:50 山崎 仁朗 (社会学)
「集落点検」から見えてくるもの
- 17:00~ 質疑応答及び閉講式

会場 岐阜大学地域科学部(岐阜市柳戸1番1)
1階 地域科学部 地101教室

受講対象者 高校生以上の一般市民
(関心のある方なら、どなたでも受講できます。)

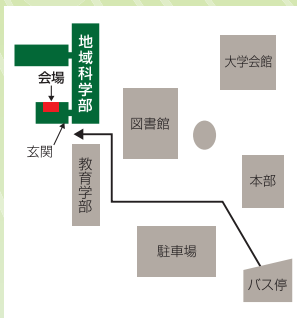
定員 100名
(定員を超えたときは、お断りすることがあります。)

申込み期限 9月19日(金)

申込先・問合せ先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 岐阜大学地域科学部総務係
TEL: 058-293-3003 FAX: 058-293-3008 E-mail: chiiki@gifu-u.ac.jp

申込み方法

受講を希望される方は、「住所、氏名、年齢、電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により下記へお申込みください。手話などの別途対応が必要な方は、8月末までにご相談下さい。ご連絡いただいた皆様情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡下さい。



第1回 9月27日(土) 開講式 12:50~13:00

13:00~13:50

統計から見た岐阜県の現状

清水浩二 (岐阜県環境生活部統計課)

将来にわたって、活力があり、住みやすい地域を創造していくためにはどんなことに取り組んでいくべきなのか、単純に答えを導き出せる課題ではありません。いろいろな立場の方の知恵と力を結集し、試行錯誤しながら取り組まなくてはなりません。地域の将来を考えるためには、地域の現状を知り、生の声を聞き、そこから見えてくる課題と解決のヒントを探らねばなりません。地域の現状を知るには、統計データが手掛かりとなります。

地域を構成するのは人です。すなわち、人口の推移や将来の見通しはどうなっているのか、人口の年齢構造はどう変化していくのか、地域に住む人の生活を支えているのはどんな産業なのか、世帯構成などからみる暮らしぶりはどうなっているのか、他の地域と比べるとどんな特徴が見えてくるのか、統計データから見た岐阜県の特徴についてご紹介させていただきます。統計データから垣間見える現状を認識いただくことで、地域の将来を考えるきっかけとなれば幸いです。

14:00~15:20

地域の自然を活かしたまちづくりを考える

向井貴彦 (保全生態学)

私たちの住んでいる岐阜県の市町村が田舎であることは否定できない事実です。それなら、田舎であることを脱却して都会を目指せば地域は発展するのでしょうか？

おそらくそうではないでしょう。岐阜ではきれいな水と空気はタダ同然で、庭の柿や釣ってきたアユ、山菜や獣肉などをご近所で分けあったりしますが、都会ではそれらに大金を払わないと手に入りません。また、都市にあるものは何でも通販で買えるので田舎だからといって手に入らないものはありません。「ここは田舎だから何も無い」なんていう考えは昔のことであって、実は田舎には「何でもある」のです。

特に重要なのは自然です。きれいな山や川は都市には無い財産です。さらに、それぞれの地域には固有の動植物が生息しています。固有の自然、歴史、伝統文化があれば個性的なまちづくりにつながります。そこで、「都会になる」のではなく「都会の人が来なくなる」にはどうすればいいかを考えてみたいと思います。

15:30~16:50

「新しい公共」とNPO税制～「寄附文化」について考える～

山本公德 (行政学)

少子高齢化が進み、一部の大都市を除いた多くの地方自治体では、「人口減少」をも視野に入れた政策の展開が避けられなくなっています。そうした中で、行政事業を縮小し財政支出を節約するだけでなく、行政と市民の関係自体を見直していこうとする動きが始まっています。

今回は、このような「公」と「私」の新しい関係を模索する「新しい公共」に向かう動きの中から、税金の使い道にかかわる問題として「NPO税制」の変遷を取り上げてみたいと思います。例えば近年、NPOへの市民の寄附に対する税制的な優遇措置が拡充されつつあるのですが、そこには、「寄附文化」の推進によって税制のあり方を変えていこうとする発想が含まれています。講義では、こうした動向の功罪の検討を通じて、これからの行政と市民の望ましい関係性について考えてみたいと思います。

第2回 9月28日(日) 開講式 17:00~

13:00~13:50

岐阜市におけるコミュニティ支援

長尾勝広 (岐阜市市民参画部市民参画政策課)

近年の都市化傾向や個人の価値観の多様化などを背景に、地域でのつながりが薄れてきたといわれています。防災や環境などあらゆる分野において、より安全・安心で住みよい環境を築くためにはそこに住む住民の支え合いと助け合いが不可欠です。そのためにも、自治会、各種団体あるいはボランティア団体やNPO法人などが対等な立場で信頼と理解のもとに多くの地域の皆さんが広く参画できる話し合いの場(まちづくり協議会)が必要ではないでしょうか。

現在、岐阜市では地域の生活基盤に根差した基本的なコミュニティとして、地域活動の主導的な役割を果たしている「自治会連合会」を単位に、21の「まちづくり協議会」が設立されています。この「まちづくり協議会」が設立されるまでの様子や、設立後の実際の活動の様子を紹介します。

また、私たち市民がまちづくりの主権者であることを基本理念とした「岐阜市住民自治基本条例」について紹介し、これからの市民協働について考えます。

14:00~15:20

甦りはじめた岐阜の街なかの風景

富樫幸一 (経済地理学)

大型店の閉店、柳ヶ瀬や問屋町のシャッター通り化、路面電車の廃止と、岐阜市の街なかはバブル崩壊後の20数年で大きく衰退しました。郊外の大規模ショッピングモールの乱立や、名古屋への時間距離の近さが人が来なくなった要因でしたが、岐阜駅から柳ヶ瀬周辺にかけての居住人口の減少や、商店街の店主の高齢化と後継者の不在など、地域の中で抱えている問題も大きいです。一方、この10年ほどの間に新しく個性豊かな小さな雑貨屋やカフェができています。「マイノリティ・リタイラー」という言葉で表されるそうした人たちの動きに合わせて、マップづくりやまち歩きに我々は学生と一緒に励んできました。「長良川おんぱく」の一つ、「ひとさじさんぽ」では喫茶店やスイーツめぐりをして、お店の人や参加者とのふれ合いを楽しんでいます。街を歩けば行き当たる風景や人々を紹介しながら、街なか甦っていき姿を紹介します。

15:30~16:50

「集落点検」から見えてくるもの

山崎仁朗 (社会学)

かつての高度経済成長期に生じた「過疎」は、農村部から都市部への人口移動(人口の社会減)がおもな原因でしたが、人口減少時代を迎えたいまの日本では、死亡数が出生数を上回ること(人口の自然減)による地域社会の存立の危機は、都市部も含めた普遍的な問題となっています。現在、その危機的な状況がもっとも先鋭化されたかたちで現われているのが中山間地域の「限界集落」ですが、実際には、人口の自然減によって集落が消滅したという事例はほとんどなく、地域コミュニティの脆弱性という点では、むしろ都市部の地域社会のほうが深刻だという指摘もあります。そこで、この講義では、郡上市和良町の集落を皮切りに岐阜県内でも少しずつ始まっている「集落点検」と、その成果にもとづく「再生」へ向けての最先端の取り組みを紹介し、これを素材として、人口減少時代における地域づくりの課題と可能性について、受講者の皆さんとともに考えてみたいと思います。